

日本応用心理学会第 86 回大会 特別講演

## アニメに見る「感情の谷」

日 時：2019 年 8 月 25 日（日）

場 所：日本大学商学部 1 号館 1303 教室

企画者：日本応用心理学会第 86 回大会委員会

司会者：外島 裕（日本大学商学部）

講演者：横田正夫（日本大学文理学部）

### 1. 日本のアニメの特質

日本のアニメは多様な作品が量産され、日々視聴者に届けられている。複雑な物語であったり、刺激的な物語であったりする。マンガを原作にしたものも多い。そうした中で特徴をあげるとするならば、作中人物の感情や気持ちが重視されるということである。画面上で登場人物が動いていなくても、主人公の心情がモノログで語られる。動いていない人物に、観客が感情移入してしまうのは、そうした主人公の心情が言語的に語られるからである。そして心情を語る主人公は、感情のコントロールを失いやすく、危機的な場面に遭遇すると激情にかられる。そして日常的な感情レベルから逸脱し、異常な状態に陥る。こうした危機に遭遇し異常な状態に陥ることを「感情の谷」として紹介した（横田，2017）。感情の谷に落ちて、そこで悟りを得て、現実に戻ると、人格のレベルが高まっており英雄になる。こうした英雄が好まれてきているように見える。

感情のコントロールを失いやすいという特徴は、普通の一般人と同様であり、ヒーローと言うよりは市井の人ということを強調する。あるいは感情のコントロールを失いやすいということの背景に、欠点を多く持ち、劣等感の塊といった弱点を持っていることもある。そうした弱点を持った主人公は、多くの視聴者と、同じような状態にあるということであろう。そしてそうした主人公が、衝撃的な出来事に遭遇し、感情が高まり、耐えがたいほどになる。そして耐えられる許容範囲を超えてしまう。観客は、そこまで感情が高まるのだから、耐えられないのは仕方がないと

思う。主人公はこうして精神の異常状態に陥る。異界であったり、無意識に陥ったりする。なぜ異界や無意識なのか、というと、そこが主人公の心理的な避難場所になっているからである。そこに閉じこもれば、安全、という心の奥底の自我の避難場所である。本来、異界や無意識は、安全な避難場所ではないであろう。異界であるならばそこに行き適応するのにそれなりの時間も必要であろうが、そういった適応の時間は通常は用意されない。また無意識世界も、意識的なコントロールのきかない世界であろうから、欲望や願望がむき出しになり、安住の地と言った趣は本来はないであろう。しかしアニメでは、安全な空間として提示される。安全の空間であるので、そこに閉じこもることに何のためらいもない。むしろそう望むので、外に出たいとは思わない。この状態が続けば、精神病状態ということになるのであろう。アニメの良くしたところは、その安全な場所から外に出ることを強要する存在が登場する。外部から援助者がその安全な場所にやって来て、主人公の役目を自覚させ、現実世界に引きもどす。主人公は、自ら自分の殻の中に閉じこもるが、その殻を破って外に連れ出してくれる他者がいる。依存対象がいるということである。こうした依存対象がいるということも、視聴者にとっては、安全に閉じこもっていられることを感じさせる要因になるのであろう。他者に導かれ、外に出た主人公は、英雄として活動を開始する。「感情の谷」の特徴的なことは、心の奥底に避難所があり、そこに他者が助けに来るといった構図である。助けに来てくれる他者の存在は、他者の心の奥底にまでやって来るといった心の絆の強さを示し、主人公が孤立していな

いことを示す。

「感情の谷」の表現は、時代と共に進化してきているので、それを代表的な作品を手掛かりにして見てみたい。取り上げる作品は「太陽の王子 ホルスの大冒険」(1968)、「幻魔大戦」(マンガ原作, 1967, アニメ作品, 1983)、「進撃の巨人」(マンガ, 2009~, テレビアニメ(第1期), 2013)、「君の名は。」(2016)である。

## 2. 「太陽の王子 ホルスの大冒険」(1968)

「太陽の王子 ホルスの大冒険」は高畑勲監督の初長編アニメである。

主人公はホルスという特異な14歳の少年である。アニメの始まりでは、岩場で、銀色狼たちと斧で戦っているホルスが描かれる。斧の柄に紐をつけて投げつけて狼たちを蹴散らす、銀色狼の牙に紐が切られてしまう。こうして岩場に追込まれる。するとその岩が急に動き出す。岩の巨人であった。岩の巨人は、狼を追い払う。岩の巨人は自ら岩男のモーグと名乗り、狼は悪魔グルンワルドの手下であるとホルスに教える。モーグは肩の痛みを訴える。そこには剣が刺さっていた。ホルスは巨人の身体を登り、肩に刺さった剣を引き抜く。巨人は剣が鍛え上げられた時に「太陽の王子」と呼ばれるだろうと予言を残す。ホルスは独りで狼と戦い、モーグに出会ったというように、不可思議な体験をする主人公であり、神話的世界の住人であった。その後も不可思議な体験を繰り返す。

熊のコロがホルスを呼びにやってくる。父が亡くなりそうだという。彼は父親と二人だけで孤立して暮らしていた。死の床の父は、仲間のところへ行くように言葉を残して亡くなってしまふ。ホルスはコロを連れて、仲間を探すために海にのり出してゆく。ある海岸に辿り着くと、大鳥に攫われ、コロと別れてしまふ。大鳥はホルスを崖に突き落とす。転がり落ちるホルスは、紐の付いた斧を投げる。斧が、何かに引っかかり、落下が止まった。ホルスは紐を伝って攀じ登ってゆく。辿り着いた先にはグルンワルドが立っていた。ホルスの斧をグルンワルドが手にしていた。グルンワルドはホルスに弟になれというが、ホルスはそれを拒否する。グルンワルドが斧を離すのを利用して反動で斧でグルンワルドに攻撃を仕掛ける。しかし、崖の縁にいるホルスは、結局崖から落ちてしまふ。ここでの悪魔との対面は、ホルスの悪魔に対す

る攻撃心をより強める。激情のホルスが、崖から落下し、その後水上に倒れたホルスは川に流され、村に辿り着く。つまり感情の谷に落ち込んだホルスは無意識の状態になった。無意識の彼を運ぶ川は、ホルスを包み込むものであり、こうした包み込むものは Jung (1992)によれば母なるものの象徴である。ホルスは母なるものに助けられたということであり、そのため何の抵抗もなく村の中に受け入れられる。村は、大カマスがサケの遡上を妨げているので困っていた。大カマス退治に行った村人たちは、殺されてしまったのである。それを見たホルスは独り大カマスを倒すために出かけて行き、激闘の末、倒してしまった。サケが遡上してきて、村は救われた。このようにホルスは、悪魔との戦いで激情にかられながら無意識状態に陥り、川という母なるものに抱かれて村に辿り着き、目覚めると悪魔の手先の大カマスを倒してしまふ。感情の谷に落ち込んだホルスが英雄として村に現れたのであった。しかしこの時の無意識状態の援助者は川であり母なるものといった象徴的なものでしかなかった。ホルスの感情の谷への落ち込みは再度起こってくる。そのことを語る前にヒロインのヒルダ(15歳)について紹介する必要がある。ヒルダについて監督の高畑(1983)は「行動とところがさらに表面のところが深層のところがしばしばくい違ってはげしく揺れ動く人物です。心理学でいうアンビヴァレンツ(ひきさかれ)に悩む複雑な人物像を描くことはアニメーションにとって全く不得手なことで、特に当時としてはただただ無謀な冒険でしかなかったといえるかもしれません」(p.148)と述べている。

### 2-1 ヒルダ

大カマスが倒されたことを知ったグルンワルドは、銀色狼に命令して狼の大群で村を襲わせる。ホルスは、銀色狼を追って独り村から出て行く。しかし見失って、廃村に辿り着く。迷路のような道を辿ってゆくと歌声が聞こえる。歌声に導かれてゆくと水辺の廃船の舳先に座って竖琴を弾いている少女ヒルダがいる。ヒルダは、ホルスに不思議なことをいう。彼女は、悪魔に襲われた村の生き残り、悪魔の呪いがかけられていると語る。さらに淋しくはない、動物の友達のリスのチロとフクロウのトトがいるから、と言うのである。ホルスは淋しくないといっているのを聴いているにもかかわらず、「本当は君も淋しいんだ

ね」と言い「僕が一人ぼっちだった時みたいに」、と返すと、ヒルダは「あなたも？」と言い、「じゃあ私達兄妹ね、双子よ、きっとそうよ」と言う。

ホルスは、ヒルダの淋しさに共感し、自身が一人でいて淋しかったことから連想しヒルダも淋しいと思っている。この連想は普通のものである。それに対し、ヒルダは一人ぼっちだったということを通項にして、兄妹、さらには双子、と断定している。これは述語の共通性を基にして主語を関連付けてしまう、統合失調症の思考障害の一つに考えられている述語論理(横田, 2006)である。このことはヒルダには思考の混乱があることを示唆している。

ヒルダは、美しい歌声を聴かせることによって村人たちの働く意欲を削いでしまう。ヒルダは悪魔グルンワルドの妹として、村を混乱に陥れるために送られてきた破壊工作員なのである。ヒルダには人間の心も残っており、心が揺れ動く。というのも、慕ってくる村の幼女マウニ(3歳)がいるからであり、彼女だけは村の破滅から助けだそうと考える。しかし善意の象徴のリスのチロは、もう一人ヒルダが出来るだけだと強く反対する。ヒルダは悪魔の妹であることを改めて自覚する。

水辺で、ヒルダが一人で歌を歌っているところにホルスがやって来る。ホルスはここでも「淋しいんだね、一人ぼっちで」とヒルダに語り掛ける。ホルスはヒルダの感情に共感している。そのため苦しいことや悲しいことを話してしまうようにホルスは促すが、ヒルダは「なんて？いまにあなたが、この手であなたを殺すんだって」と言うのである。ヒルダは、ホルスを前にすると、感情の抑えが利かなくなってしまう。グルンワルドの命令をそのまま口に出し、抑えておくことができない。ヒルダの心の混乱は顕著なものであることが示唆される。ヒルダは、結局、グルンワルドの命令に従って村人を扇動し、ホルスが斧で村長を殺そうとしたと濡れ衣を彼に着せることに成功する。

村を追われたホルスは、荒野で、視線の先にヒルダがいるのを見出す。ヒルダの横を通り過ぎようとするのを、ヒルダはホルスをとどめる。ヒルダは、「なぜあなたと闘おうとしないの？」と尋ねるが、ホルスには何を言っているのかわからない。フクロウのトトがヒルダはグルンワルドの妹、と言うのだが、ホルスはそれでもそれを信ぜず「ウソだ！ヒルダって

くれ、ウソだって！」と叫ぶ。ヒルダが短剣を持って、ホルスに迫ってくるのだが、それでもホルスは「人間に戻れる」とヒルダを庇う。ヒルダは人間にはなりたくないというにもかかわらずホルスは「きみは自分をだましていて。いやだまされているんだ」と言うのである。

ホルスは、ヒルダをどこまでも信じている。この確信は、強固である。この強固さの背後には何があるのだろうか。上記のホルスがヒルダを一人で淋しいと言うときにはいずれも水辺に二人がいた。Jung (1992)によれば、水辺は、境界領域であり、現実と異界の境目を示している。そして水は包み込むものであり、包み込むものは母なるものの象徴であると上述した。そうした象徴的な考えに従えば、水辺で淋しさを語り合うのは、ホルス自身が淋しい存在であり、水辺の母なるものに包み込まれる願望を持っているということである。ホルスの父親は登場するやいなや亡くなり、母親は全く登場しなかった。母親を知らないホルスにとって、母性への憧れがあるのであろう。そうした憧れは、淋しいという感情が共通するヒルダと重なり合って、出会ったことのない母性をヒルダに見ていたということと思われる。ホルスがヒルダに一目惚れしてしまったのには理由があったのである。ヒルダは母なるものの一つの特徴である破壊する側面を見せ続けているのにもかかわらず、ホルスはその保護する力を見続けようとしている。ホルスにとってヒルダはそうした母なるものの象徴を引き受けた存在なのである。ヒルダの現実の姿を無視するホルスの確信は、ホルスの硬直した心を示している。

## 2-2 迷いの森

躊躇うヒルダにフクロウのトトがホルスを迷いの森に突き落とすことを強要する。目をつむったヒルダが剣を振り下ろし、ホルスは迷いの森に落下してゆく。迷いの森は物理的な空間のようであるが、心理的空間のようでもある。その証拠に、ホルスは、地面に落下せず、迷いの森の中で浮遊している。そしてホルスはここにおいてもヒルダの姿を目にし、ヒルダに向かって叫ぶ。人間の心に戻ってくれ、悲しいヒルダの心に、と。迷いの森に落とされてなおホルスはヒルダを信じている。

信じていたヒルダに迷いの森に落とされたホルスは、感情の谷に落ち込んだとみる事ができる。その

ホルスの心の混乱を示すように、上記のように、ヒルダを幻視し、ヒルダの声を聴く(幻聴)。ホルスは彼の体験を走馬灯のように繰り返して見る。仲間の元へ行けといった父親の乗った船の後にヒルダが、現れる。その背後にグルンワルドがおり、グルンワルドはお前を弟にしてやると言い、ヒルダは、私たちは兄妹、双子よ、と言う。村人たちがホルスに襲い掛かるのも見える。臨死体験のように過去の出来事そのまま走馬灯のように繰り返されてホルスの面前に現れた。感情の谷に落ち込むことは臨死体験に相当するのである。その中でヒルダが水上でホルスに接近してくる様子が描かれる。それを目にしたホルスは思わず「来るな」と叫び、斧を投げつける。斧はヒルダの顔に当たり、その瞬間無数のヒルダになって広がってゆく。この場面においても、水が出てきた。水の中のホルスに対し空中で接近するヒルダは、母なるものの象徴であろう。母なるものには保護する力ばかりではなく破壊する力も象徴される。破壊する力にさらされると、自我の成長が妨げられる。ホルスが「来るな」と叫んで斧を投げつけたのは、母なるものの破壊する力への抵抗と思われる。

ホルスのヒルダとの関係をみてくると、ヒルダは述語論理(横田、2006)が示すように病的な思考を示し、またホルスを殺すといった発言もしている。こうした発言をホルスからみれば、ホルスの愛情表現が、ヒルダの非論理的な思考によってはぐらかされ、時には殺すという暴言によって拒否されたと見ることができる。ヒルダが母なるものの象徴ということであれば、このヒルダの振る舞いは一般的に見られる母親の無視や言語的な虐待に対応しよう。ホルスは、母親の無視や言語的な虐待を被っている被虐待児の立場にある。そのため、剣を向けられて殺されそうになった時においてもヒルダの愛情を疑うことができなかった。ホルスのヒルダは人間になれる、という訴えは、母親になって欲しいという子どもの切なる願いである。それ故に迷いの森の中で「来るな」と叫んだのは象徴的な出来事である。これはつまり虐待する母親への拒否反応である。

この拒否の後においてすらホルスはヒルダのイメージを持続させる。ホルスの目の前のヒルダが幾人ものヒルダに分裂する。分裂したヒルダはホルスに向かって言葉を発する。ヒルダはホルスを溺れさす、と。溺れさす水は、繰り返しになるが、母なるも

の破壊する力の象徴である。それをヒルダの声として発せさせているということは、ホルスが、ヒルダの持っている破壊する力を意識の中で言語化できたということであろう。ヒルダの破壊する力を対象化し、これが切掛けでホルスは、悟りを得る。すなわちバラバラになったヒルダの一つにすればよいという考えであり、それを一般化したバラバラになった村人たちの心の一つにすれば悪魔を倒すことができるという認識であった。母なるものの破壊する力を乗り越えたホルスが、悟りを得て、迷いの森を脱することができた。現実に生還したホルスは村に戻り、個人の力では鍛え直すことができなかった太陽の剣を、村人たちがみんなで作り出した炎の中で鍛え直すことに成功する。コミュニティの全体の力が結集すれば悪魔をも倒すことができる。その象徴が太陽の剣の鍛え直しである。攻めてきたグルンワルドを太陽の剣で迎え撃ち、助けにモーグも現れ、悪魔を倒すことができた。

以上見てきたようにホルスは感情の谷に落ち込む。しかしこの作品では最初に述べたような隠れ場が、感情の谷の底にあるわけではなかった。そしてそこへ外から支援者がやって来るということもなかった。ホルス自身がヒルダのイメージを浮かべ、そのヒルダとの対話を通して、ヒルダの破壊する力を退けることができ英雄として現実に生還した。母なるものの破壊する力の象徴としてのヒルダとの対決が、ホルスの自我の確立に必要であった。しかしその一方でヒルダのイメージの変化がホルスの悟りを誘発しているのであるから、母なるもののもう一つの側面の保護する力が、ホルスの心の回復を支援したことにもなる。支援者としての母親イメージがあったのである。

### 3. 「幻魔大戦」

「太陽の王子 ホルスの大冒険」公開の1年前の1967年に週刊少年マガジンにマンガ「幻魔大戦」が連載され、1968年に単行本化された。このマンガは、主人公の高校生東丈が感情の谷に落ち込み、そこで悟りを得るといった典型的なパターンを示していた。そこでまずマンガ版の「幻魔大戦」についてみてみたい。原作は平井和正、マンガは石森章太郎である。

#### 3-1 マンガ版「幻魔大戦」(1967)

主人公の東丈は背が小さく、野球の正選手になる

ためにがむしゃらな努力を重ねて、正選手の発表の日に、正選手になれると確信していたのにも関わらず、なれなかった。拗ねて、家で姉に当たると、大柄な弟に押搦され、腹をたてて弟に挑みかかるが、逆に投げ飛ばされてしまう。それで家を飛び出してしまふ。このようにもともと身体的に劣っていることを自覚する余り、がむしゃらに行動するが、その成果が上がらない。そのことで、感情的になっていた時に、不気味な巨人がピストルのようなもので、丈の胸に発砲する。巨人は丈を追いかけ、廃ビルで、ビルを壊すための鉄球が丈を襲う。避けた丈の背後で鉄球がビルを壊し、瓦礫の山が丈をめがけて落下してくる。その時に、丈の超能力が発動し、落下する瓦礫を丈の頭上の空中に止めてしまふ。丈には超能力が潜在し、その超能力が生命の危機にかかわる時に発動した。

このように主人公の丈は、劣等感の塊であり、劣等感を補償するためにがむしゃらな行動力を発揮するが、劣等感は補償されない。そのため、余計に落ち込んでいた。そんな時に、不気味な巨人が攻撃してきたので、無意識的に、潜在する超能力が発動した。このことは丈が感情の谷に落ち込むと潜在能力が目覚めることを暗示している。

不気味な巨人は宇宙から地球を守るためにやってきた戦士ベガであることが知られ、地球の超能力者プリンセス・ルーナと共に、地球を守る超能力戦士をリクルートするために活動していた。丈はその候補者の一人であった。ベガの行動は、丈の超能力を目覚めさせる荒療治であったのであり、それがうまく成功した。しかし背が低いことが劣等感であった彼が、意志の力でものを動かす念動力を手に入れたことで、逆に誇大的な考えに憑りつかれ、ナポレオンのように世界を支配することも夢ではないと考えるようになってしまふ。プリンセス・ルーナは人の心を読み取るテレパシーを有しているために、丈の誇大的な考えを危惧し、彼女が知っている幻魔大戦のありさまと幻魔大王のイメージを、テレパシーを使って、丈に直面させる。がむしゃらに行動する丈の行動力はここでも発揮され、身につけた念動力を目いっぱい使用して幻魔大王のイメージに立ち向かうが、相手にしていたのは岩山であったことに気づき、意識を失ってしまう。丈は幻魔大王に敗れたと思い、心の奥底に逃げ込んでしまふ。ベガは丈の精神は異常をきたしていると判断する。意識を取り戻さない

丈をこのままにはしておけないと、ベガが他者の心の中に入り込んでゆく危険性を伝えるにもかかわらず、プリンセス・ルーナはテレパシーで丈の心の中に入り込んでゆく。丈の心の中では、上記の正選手になれなかった記憶から始まりネガティブな記憶がひしめいていた。弟との喧嘩に負けたこと、いじめにあつて泥団子を口に中に押し込められたこと、両親が丈のことを「できそこない」と愚痴を言っているのを聴いていたこと、「生まれてこなければよかった」と姉の膝の上で泣いたこと、首吊り自殺を試みたこと、姉にもっと大きくなりたかったと言いついたことが次々に浮かんできていた。いじめによって自殺企図までしていた丈の履歴は悲惨なものであったが、プリンセス・ルーナは丈のその体験を丈の心の中で同様に体験したことになる。そうした丈を保護していたのが姉であった。丈にとって姉の膝の上が安住の地であった。そこへプリンセス・ルーナのイメージがやって来る。姉は「ここはおさない」とプリンセス・ルーナの前に立ちはだかる。プリンセス・ルーナは強い口調で「おどき」と命令する。そして丈の目の前に行く。丈の手を取り「心のかくれ場所から外へでるのよっ」と引っ張りようとする。それに対し丈は姉に助けを求める。丈の両手をプリンセス・ルーナと姉がそれぞれ持って、引っ張り合うことになる。プリンセス・ルーナは丈に向かって「一生できそこないですごすつもりなの!!」と声を掛ける。こうして丈は意識を取り戻す。丈は、プリンセス・ルーナを幻魔大王と闘う仲間、と理解する。

ここでの顛末は「感情の谷」の典型的なものである。丈は、誇大感の虜になり、巨大な力を手にして何でもできると過信していた。しかしプリンセス・ルーナの見せた幻魔大王と闘って敗れたと思いついた。彼の誇大感が粉々になってしまふと、自我が崩壊してしまふのである。心の崩壊(精神の病)が心の奥底へ逃げ込むということで表現された。心の奥底では姉が丈の保護者になっており、姉の膝の上が彼の安住の地となつていた。そこは安全であるので、心の外に出ることを必要としない。そこへ外からプリンセス・ルーナが丈の心の中に入り込んで、安住の地から、丈の心を外に連れ出すことに成功した。こうして丈は、プリンセス・ルーナと共に戦う戦士の自覚を持った。「感情の谷」に落ち込んだ丈は、外部からの救済者の手によって現実に生還し、戦士として

の自覚、つまり悟りを得た。

この「幻魔大戦」は、マンガで描く心の病のモデルでもある。それは戦いに敗れ、それがショックで心の奥底に逃げ込むというものである。そこから救済されるためには外部からの援助者が必要である、ということである。このモデルは実際には臨死体験に対応していると思える。分析心理学者のJungは1944年に心筋梗塞を患い危篤状態に陥った。Jungはその最中、様々なビジョンをみた。自伝(Jung, 1973)をもとにまとめると次のようになる。Jungは地球外にあって、眼下に地球をみた。地球から遠ざかっているように感じた。目を転じると真っ暗な石塊がみえた。入口がありそこに近づいた。すべての経験が走馬灯のように彼から消え去り、離脱した。Jungは「私は存在したものの、成し遂げたものの東である」と悟った。こうした時、下からイメージが浮かび上がってきた。主治医のものであった。そのイメージはJungに地球から離れる権利はなく、引き返さなければならぬとメッセージを送ってきた。そしてイメージは消えた。Jungは意識を回復した。このJungの体験は、上述の東丈の体験によく似ている。すなわち危篤状態という強烈な感情体験があり、地球外にあるといった意識は感情の谷にあることに相当し、そこに石塊をみだしているのでありこれは避難所に相当し、地球から主治医のイメージがやって来るのは、心の外から救済者が来るのに対応している。そしてJungは自身のあり方についての悟りを得て、意識を回復したのである。東丈の感情の谷は、臨死体験に類似したものであったといえよう。

東丈は、その後も幾度か意識を失うことがあった。そのひとつがラスト近く、仲間と別れ独りになり地球に襲来した幻魔と闘おうとした時である。丈は地球に派遣された幻魔兵団の司令官シグと闘うことになる。丈の力は全く歯が立たず、滅びの美をみたかったシグをがっかりさせてしまう。戦うのも馬鹿らしいと丈の身体を石に変える魔法をかけてしまう。足元から徐々に石になって身体全体が石になった時、彼の身体の背後から突然炎が沸き上がりシグを滅ぼしてしまう。炎は姉の姿となり、丈の前に現れる。丈は「ね…え…さ…ん!!」と石化した口から声を上げる。そして石化した目から涙を流す。炎に包まれて亡くなった姉の精神が残留思念となって丈を守っていたというのである。石化してしまった丈の身体を、ナオ

ミという超能力者の少女の人形が、ナオミの魂が乗り移って、丈の身体をマッサージしはじめる。すると丈の身体は柔らかくなってゆく。こうして石化した体が回復する。丈は亡くなった姉の意志が自身を守ってくれたことを思い、人間の意志の力の大きさを悟り、新たな戦いに向かう。このエピソードでは、丈の心の内面についての描写はないが、身体が石化したということによって意識を失ったとみることができる。そして石化した丈を守ったのが、亡くなった姉の残留思念であり、ナオミの魂が乗り移った人形であった。いずれも生身の人間ではない精神的なものが丈の援助者となっていた。丈の心の中に入り込んで援助したプリンセス・ルーナと同様な役割を演じている。

こうしてみると丈の援助者はプリンセス・ルーナ、残留思念となった姉、ナオミの魂の乗り移った人形といったように全て女性であった。女性の保護する力が丈に働いているとみることができる。

上述の「太陽の王子 ホルスの大冒険」のヒルダには母なるものの破壊する力が象徴されていたが、ここでの女性は保護する力が象徴されていた。こうした母なるものの力はJung派の考えである。Jung派の考えがこうした作品にどのような影響を与えているのかについては確かではないが、河合隼雄が「ユング心理学入門」を著したのが1967年であったことは同時性を感じさせる。この年代以降に、感情の谷が描かれるようになったと思われる。

### 3-2 アニメ「幻魔大戦」(1983)

「幻魔大戦」はりんたろう監督によって1983年にアニメ化された。角川アニメの第1作であり、キャラクターデザインは大友克洋で、青年期のキャラクターをアニメに導入したはじまりと思える。マンガでは「プリンセス・ルーナ」であったが、アニメでは「プリンセス・ルナ」に改変された。キャラクターの設定はマンガと類似している。丈は背が低く、野球の正選手にはやはりなれなかった。しかし彼には恋人があり、その恋人は丈の姉には負けると自ら去ってゆく決意をする。丈は失恋という痛手も同時に体験することになった。そして丈の体験する感情の谷は、少し改変されている。

丈はマンガと同様にベガによって超能力を覚醒させられ、ルナのテレパシーがみせた幻魔大戦のイメージに呑み込まれ、意識を失ってしまった。幻魔大

戦のイメージが、丈の意識の容量ないしは意識の反発力を越えてしまったのであり、幻魔に負けてしまったと思いついた丈は精神に障害が生じてしまった。ルナは意識を失った丈の身体を抱き、丈の額に自身の額を当てて、丈の意識の中に自身の意識を投入する。意識の中の丈は裸で身体をまるめている。この様子を出版されたシナリオ（平井・石森・桂・内藤・真崎，1983）では「子宮の中の胎児のような恰好でいる、丈（意識体）」(p.114)と表現している。ルナの丈を呼ぶ声が聞こえて、丈が振り向く。彼は、ルナの姿を目にする。ルナが追って来たと思いついた丈はさらに心の奥底に逃げる。逃げる丈の身体は徐々に幼くなり、果ては「姉ちゃん」と泣きながら走る幼児になっている。幼児になった丈は姉の膝の上に抱かれている。よく見ると丈の幼い右手は姉の胸にある。姉は母親の役割を演じているのである。そこは居間のようなところで、柱時計があり、時計の文字盤が破損してめくれているので、針は進まない。つまり時間の進まないことが示されている。丈の心の中には、姉の膝の上という逃げ場所があり、そこは無時間的な空間であった。無時間的な空間は、無意識世界の特徴でもある。そこへルナの意識が入り込んで来て、丈の意識に働きかける。このシーンのシナリオでは、ルナは丈がしがみついている姉は「あなたの恐怖が生み出した、エゴイズムの罠！自己逃避の、かくれ蓑！実体のない、ただの虚像にすぎないもの…」(p.117)と丈に語り掛ける。これを受けて丈の前から姉の姿が消える。そして丈の身体は元の青年のものに戻る。丈は裸のまま、右手をルナの手に合わせて。そして現実に目覚める。

以上のように、ルナはマンガで描かれていた丈の心の闇を見ることはない。ただ、幼児に退行した丈の姿を見るだけである。マンガでは丈は着衣のままであったのが、ここでの丈は裸である。裸でルナの前にあり、にもかかわらずそこに羞恥の心が描かれることがない。このことは丈には失恋した彼女がいたことと関連し、また幻魔の先兵ザンビがその彼女の身体を乗っ取り丈を性的に誘惑しようとするエピソードがこの後に続くこともあって、性的な含みがあるように感じる。青年期のキャラクターを描いているのであり、青年期には性的な欲動の高まりもある、ということなのであろう。目覚めた丈は、ルナの膝に頭を載せている。こうした関係も、性的な含みを受け

て、両者の親密な関係を暗示する。マンガでは、回復した丈を戦士とは認めないという厳格さがルナにはあったが、アニメではルナは丈を助けるためにエネルギーを使い果たし、丈に何かを言う気力もなく倒れ、眠いと言ってベガの腕の中で眠ってしまう。ルナにかわりベガは、回復した丈に、力を自由に操れるようになれば一人前の戦士になれると伝え、飛去ってゆく。感情の谷を抜けることで、戦士としての通過儀礼が果たされたかのようなのである。

次に地球壊滅作戦の司令官との戦いについて見てみたい。司令官の名前はカフーに替わっている。カフーとの戦いで石にされてしまうのはマンガと同じであり、残留思念の姉の炎がカフーを倒すのも同じである。しかし石化した丈を回復させるのはマンガと異なる。アニメでは、超能力者が複数参集しており、その超能力者たち6人がサイキック・ウェーブ・マッサージといった心理的な力のマッサージを丈に施すことによって、丈の石化した体が回復する。ここでは母なるものの保護する力への信頼はない。むしろ必要なのは社会人として仲間との関係を築くことであるといっているようである。

以上のように1983年のアニメでは、「感情の谷」を抜けた丈は戦士としての力に目覚め、石化した丈を助けるのは超能力者たち6人の共同した力であった。女性との関係は性愛の方向に偏移し、社会で共に戦う仲間が大事なのであった。

#### 4. 「進撃の巨人」(マンガ, 2009～, テレビアニメ(第1期), 2013)

「進撃の巨人」は「幻魔大戦」のマンガから26年経った2009年別冊少年マガジン10月号から連載が開始された。テレビアニメは2013年4月から9月まで第1期が放送された。幻魔大戦は宇宙の果てから幻魔という宇宙の破壊者が襲来するのを地球の超能力者が防衛するという話であった。「進撃の巨人」はこれよりもはるかに衝撃的な設定で、人間を食らう巨人の脅威に晒された人類は50mもの高さの壁を築き、その中にこもって生活している。巨人の人類に対する脅威は圧倒的であり、100年の安寧を続けたある時に、その脅威が現実のものとなる。50mを越す巨人が現れ、壁を破壊してしまったのである。その穴を通して巨人たちが侵入し、人間を捕食し始める。

ここでは「幻魔大戦」の幻魔に相当するものが巨人

であり、地球に相当するのが壁の中である。ただ「幻魔大戦」では、少数の超能力者が幻魔の存在を察知し、彼らだけで幻魔に立ち向かおうとしたのに対し、「進撃の巨人」では、壁の中の住人全体の脅威として巨人が存在し、巨人の脅威は周知のことであった。壁の中の住人の閉塞感および巨人に対する恐れは、極度に高いとみることができる。こうしたなかでの巨人の侵入である。侵入した巨人に捕食されてしまった者は多く、その中には母親を目の前で捕食された者もいた。それが主人公のエレン・イェーガーであった。この時10歳である。捕食されるところをみた者は、相当のショックを受けたことであろう。エレンはショックにもかかわらず、巨人を一匹残らず駆逐してやる、と強く念じる。

「進撃の巨人」の連載は今でも続いており、物語は大きく展開している。しかしここでは「感情の谷」をテーマとしているので単行本の4巻までの物語に限定してみることにする。それはエレンが巨人になり、その間の記憶を全く失っているという事態が、「感情の谷」に相当すると思えるからである。5巻目以降では巨人になることをエレンが意識的に行えるようになって行くので「感情の谷」とは異なるメカニズムを考える必要があるからである。

#### 4-1 記憶喪失

母の死後、エレンは訓練兵を志願し、3年の訓練を受け、巨人に立ち向かう戦闘技術を学ぶ。15歳の時、好成績を上げて、晴れて卒業というその日に、再び50m級の巨人が出現し、壁を壊す事件が起きる。訓練兵を卒業したばかりのエレンも、巨人と闘うために駆り出される。エレンは訓練で身につけた戦闘技術に自信があり、巨人を倒せると確信している。しかし、同じ卒業生のトーマスを目の前で捕食されたことに激怒し、立体起動装置という飛行装置を使用して、独りその巨人を追いかけたその時、下から飛び上がってきた別の巨人に足を食いちぎられてしまう。主人公のエレンがあっけなく、戦闘不能に陥ってしまう。そんなエレンの姿に接し幼馴染のアルミン・アルレルトは、同じ訓練兵の卒業生ではあるが、身体がまったく動かなくなり、巨人に掴まみ上げられ、呑み込まれそうになる。その様子を目にしたエレンは、アルミンとの思い出を思い浮かべる。それはエレンが体制から禁止本に指定されている壁の外の世界のことを書いた本をアルミンから見せられ、外の世界

に対する憧れを喚起された記憶であった。この記憶を思い出したエレンは、巨人の口の中のアルミンを、口の中から放り出し、アルミンの代わりに左腕をかみ切られながら自ら巨人に飲み込まれてしまう。なんと主人公が巨人に呑み込まれてしまった。駆逐してやると言い放っていた主人公が、あっけなく、巨人に呑み込まれてしまった。こうした衝撃的な出来事の後、巨人を殴り殺す巨人が登場し、その巨人がエレンであったことが明らかになる。エレンはしかし巨人になったことの記憶を持たない。ではどのようにしてエレンは巨人になったのであろうか。単行本の第3巻の第10話「左腕の行方」でその顛末が描かれる。

巨人に呑み込まれたエレンが胃液の中に浮かんでいる。彼はこんなはずではなかったとそれまでの訓練について想起する。絶望的な状況の中でエレンが想起するのは、訓練の様子であった。エレンの背後にはやはり飲み込まれた女性兵士がおり、彼女は「お母さん」と母親に呼び掛けている。アニメの「進撃の巨人」では、この後にマンガとは異なるシーンが挿入される。それはエレンが母親との関係を想起するシーンである。因みに女性兵士の発言もアニメでは「助けてお母さん」に変更されている。挿入されたシーンで母親が大きな布を干していると、幼いエレンが布の背後から顔を出し、両手の指で口を横に押し広げて母親を驚かすので、母親は口を開けて笑い出す。こうしたシーンが挿入されて、巨人を一匹残らず駆逐してやるとエレンが口にして巨人の胃液に沈んでゆく。そこで巨人の手が現れ、エレンを飲み込んだ巨人の中から別の巨人が出現するのであった。

エレンが巨人になる前には、アルミンとの外の世界への憧れを共有した記憶と母親を笑わせた記憶が突然浮かんできている。こうした記憶は、エレンの置かれた緊急な状況には、本来再生しえないものと思われる。臨死体験のJung (1973) が報告しているのは、先述のように、自身の生涯を展望するようなものである。それに対しエレンの記憶は断片的でしかも明瞭なものとしていきなり生々しく立ち上がってきた。こうした記憶想起は、精神病理学的には、自生記憶想起として知られ、初期統合失調症の最頻の症状とされている(中安・関・針間, 2017)。つまりエレンが初期統合失調症の症状を示し、次いで巨人になったのである。巨人になったことを異常体験とし



て捉えるとすると、このことは精神病状態の発現とみることもできる。

さて二度目にエレンが巨人になるところを見てみたい。巨人との戦いでエレンの巨人が倒れ伏した時、巨人の首のところにエレンが現れる。意識を失い、その身体には失ったはずの足と腕が再生されていた。エレンの家族に育てられたミカサ・アッカーマンは、エレンが生きていたことに喜ぶ。しかし他の駐屯兵団の兵士は、エレンが巨人の中から現れたことに不信を感じる。悪いことに意識を回復する直前のエレンは、巨人を駆逐するという強い動機をそのままに無意識的に「殺してやる」と声に出してしまう。巨人を恐れている兵士たちは、その声を耳にする。そのためエレンは、彼らの敵意的になってしまう。司令官も恐怖にかられており、エレンに向かって外壁に取り付けられた大砲から榴弾を躊躇わずに発射すると脅す。司令官はエレンに人なのか巨人なのかを問うが、巨人であった記憶がないエレンにはその質問は意味をなさず、「意味がわかりません」と返答する。ただアニメでは、「あれは夢じゃなかったのか」と言い、腕を噛み切れ、巨人の胃の中に浮かんでいるイメージが挿入される。しかし、司令官の傍には、エレンが巨人の中から現れてきたのを目撃している兵士がおり、その言を信じる司令官は、エレンの発言によって疑念を解消することはできない。エレンはさらに「人間です」と自己弁明をする。アニメではこの時「俺は昔からお前らと同じ人間です」と言い、それに合わせてエレン、アルミン、ミカサが走ってくる場面の静止画が挿入される。エレンは、アルミンとミカサと一緒に楽しい時代を過ごしていた、という思い出の一コマである。これも自生記憶想起である。現実に戻ると、エレンを守るようにミカサとアルミンがいる。ミカサはエレンを傷つけるものは容赦しないと、彼の前に出て庇うが、その行為も効果がない。アルミンは暴力によらない解決策を考えようとするが、司令官は榴弾の発射の指令を出すために右手を上げる。その時エレンは首に掛かったカギを目にし、それが切掛けで父親との会話を思い出す。父親はエレンに注射をしようとし、その時に注射のせいで記憶障害が起り覚えていないが、ミカサやアルミン、みんなを助けたければこの力を支配しなければならぬ、と語る。この記憶の再生の前にも同じ記憶の再生が紹介されたことがあった。マンガでは第3話「解

散式の夜」で、エレンは急に意識を失い、その間に父親がエレンに無理やり注射しようとしているイメージが浮かび、目覚めた時にはそれを忘れており、アニメではエピソード#02「その日—シガンシナ陥落②—」の中で、父親が無理に注射しようとして、鍵がゆっくり落下するシーンが描かれ、その後でエレンは目覚めた。エレンは父と会っていた気がすると言う。ミカサはまさか夢だよ、と答えていた。このように無意識的に父親のことが再生され、すぐ記憶から失われていたのであった。それが危急な時に、意識の中に自生したのがこの時であった。そして榴弾の発射の瞬間にエレンは手を血が出るほど激しく噛む。すると再び巨人が出現し、その手が榴弾を止めた。後には、巨人の巨大な骨が、残っているだけであった。

この場面をみると、エレンは、周囲の皆から敵意の目で見られ、榴弾で攻撃されるといった危機的な状態にある。この状態で父親とのやり取りの記憶が再生された。これは鍵をみたことが切掛けではあるが、やはり自生記憶想起である。そして何の根拠もなく手を噛むことで巨人に変身した。巨人になることが、自傷行為に連動している。もちろんそのためには、自分の、あるいはアルミンとミカサの命を守るためにという強烈な意志が背後にあつてのことであった。エレンは、直ぐに、巨人に半分包み込まれた状態で意識を取り戻し、何なんだこれは、と眩きながら巨人から身を引き離す。自身が巨人になったことの記憶がやはりない。エレンにとって巨人になることは無意識に入ることに等しい。精神病的にみれば意識を失った状態で、巨人になったのである。

#### 4-2 心の奥底への引きこもり

2度目に巨人になった後で、エレンは、自身が巨人になることで巨石を抱え、壁に開けられた穴を塞ぐ計画の一翼を担うことになる。自身が巨人になれるかどうか、確信が持てない。しかし、彼が巨人になって巨石を運び壁の穴を塞がないと人類の滅びにつながる虞がある。個人の危急存亡というよりは、もっと大きく人類の危急存亡の時である。エレンは、ミカサと他のエレンの護衛として選ばれた精鋭と共に、壁の穴を塞ぐ作戦に出かけてゆく。そしてエレンの意志通りに、手を血が出るほど激しく噛んで、巨人に変身した。

しかしその巨人には、やはりエレンの意識はない。そのため目の前のミカサに攻撃を仕掛ける。ミカサ

はその攻撃をかわし、巨人の顔に張り付いて、エレンに呼び掛ける。「私はミカサ、あなたの家族」と話しかけるのだが、巨人の右手が、ミカサ目掛けてパンチを繰り出す。ミカサはそれをかわすが、右手は巨人の顔を激しく打ち、頭の大部分を消し飛ばしてしまう。巨人は、後ろに倒れ、巨岩を背に寄りかかったまま動かなくなってしまう。動かなくなった巨人と同化しているエレンの身体は、まだ鼓動し、目を見開くことができ、エレンの意識がわずかに回復する。彼は自分が座っている、とおぼろげに意識し、そして家族の姿を想起する。エレンは毛布に包まれて窓際の本製の長椅子の上にいる。部屋の中には、真ん中のテーブルで父親が本を読み、テーブルの向かい側では母親と、台を置いてその上の上のって手伝いをしているミカサがいる。マンガでははっきりしないがアニメでは母親とミカサは皿を拭いている。安心して家族に見守られているという実感を持っているのがエレンであり、エレンはそのまま「さあ寝よう」と、眠りについてしまう。再び巨人は無意識に陥ってしまう。

こうして作戦は失敗と思われたが、そこへ事態を危惧したアルミンが駆けつけ、ミカサに替わって、アルミンがエレンに語り掛ける。アルミンは、巨人の首筋からエレンが出てきたことを想起し、その出てきたエレンの腕あたり目掛けて、剣を突き刺し、エレンを目覚めさせようとする。アルミンの声は、エレンに伝わって行く。アルミンはエレンの口癖だった巨人を駆逐するという彼の願いを思い出させようとし、お母さんを殺した奴が憎いのだろうと語り掛ける。エレンはその言葉がけに反応し、先ほどの家族の安穏とした様子を思い浮かべ、お母さんならここにいと応える。この時、アルミンは窓の外で、窓をガンガンと叩いているようにイメージされ、部屋の中のエレンはその姿を見ている。ここからの場面で、アニメではマンガと少し違うシーンが挿入される。アニメの方を見てみたい。アルミンはエレンに調査兵团なんかにどうして入りたかったのかと問う。調査兵团は壁の外に出かけて行き巨人に遭遇するかもしれない極めて死の危険性を持った役割を担っていた。エレンのそもそもの希望はこの兵团に入ることであった。アルミンの発言に反応し、エレンは自問自答を始める。どうして調査兵团なんかに、と。その彼の自問自答に対して、アニメでは、母親が振り向いてエレンを見る、という反応を見せる。過去にエレンが調

査兵团に入りたいという希望を持っていることを母親が知った時、エレンは、母親から強い叱責を受けたことがあった。そのことを意識させるような母親の振り向きの挿入であった。アルミンは外の世界の話をしなくなったのは僕を調査兵团に入れなくなかったからだろうと語り掛ける。エレンは外の世界と眩きながら立ち上がる。それまで身体を包んでいた毛布が床に落ちる。この毛布が巨人を動かなくしていたものの象徴のようであり、この毛布を脱いで立ち上がったエレンは、茫然とした表情をしている。アルミンはさらに追い打ちをかけるように、外の世界は地獄のような世界なのになぜ外に出たいのかと問いただす。後ろ向きのエレンの向こうにはエレンを見ている父親、母親、ミカサの姿がある。さらにアルミンが強く「どうして外の世界に行きたいと思ったの」と問いかける声が被さる。アニメの凄いところは、ここでエレンを振り向かせたことである。窓の外にいるのであろうアルミンに向かって、正面を向かせ、「どうしてだって」と返答させる。そしてさらに「そんなの決まってるだろ」と答える。するとエレンの方に顔を向けた父親が挿入される。ついで皿を拭いている手をやすめてエレンの方を見ている母親とやはりエレンの方を見ているミカサの姿が挿入される。そしてアップのエレンが目を大きく見開き、強い口調で「俺がこの世に生まれたからだ」と言う。「そんなの決まってるだろ」と「俺がこの世界に生まれてきたからだ」の間に、挿入された両親とミカサの姿は、外の世界へ行くことに反対していたはずであるのに、その逆にエレン応援しているかのようである。次の瞬間、正面向きのエレンの背後に、エレンを見ている父親、母親、ミカサがいた先のカットに戻る。突然、エレンの背後で、激しい炎が巻き上がり、それによって彼の背後の父親、母親、ミカサのイメージが消滅し、エレンの背後に誰も居なくなる。そしてエレンの決意の表情にカメラが寄っていく。こうして動かなくなった巨人のシーンに戻り、消滅したはずの顔面が再生し、その眼のあたりに光が現れる。巨人がエレンの意識を保ったまま活動を開始する。

以上のように、エレンの巨人の無意識の奥底には、安心できる家族の住まう居間がある。そこにエレンは、引きこもっている。そうした引きこもり状態のエレンに語り掛けたのは、その窓の外のアルミンのイメージであった。アルミンは、最初は、母親を捕食し

た巨人を駆逐するといったエレンの決意を思い出させようとするが、これはうまくいかない。それは当然である。エレンの目の前に、両親もミカサもいるのであるから。アルミンが次に働きかけたのはエレンが壁の外に出たがっていたことを思い出させることであつた。これはエレンの意識に作用し、彼の自我を目覚めさせる。「俺がこの世に生まれたからだ」という自覚は、悟り体験である。家族と共にあるエレンではなく、家族から離れて、独立して、壁の外へ出かけて行く、そうしたエレンである。旅立ちを願っているエレンである。こうした願いは、モラトリアムの青年期を脱して、社会に出て一人前の職に就くと決意することと似ている。エレンのこの時の心理学的な意味での達成課題は、家族の保護から離れ、独立した自我を持つ存在として、壁の外(現実社会であれば社会)に出て行くということである。こうした達成課題を乗り越えるためには、エレンは、家族としてエレンを守ろうとしたミカサを攻撃し、心の奥底の安住の地の家族イメージを捨てなければならなかつた。こうしてエレンとしての意識が巨人の中で目覚め、壁の穴を塞ぐ作戦をわが身に引き受ける。

#### 4-3 巨人になることの心理学的意味

以上ではエレンが3回巨人になる様子を紹介した。その顛末を心理学的に考えてみたい。最初にエレンが巨人になったのは、エレンが足と腕を失って、巨人の胃液の中に沈んで行く時であつた。この時はエレンが殆ど死ぬ、という時であり、通常であれば臨死体験が生じる時である。これより先に、足を失って、アルミンが巨人にのみ込まれる時、先述のように、エレンはアルミンと共に壁外に出かけて行く夢を語っていたのを思い出した。そして巨人の胃液の中で、母親を笑わしているシーンを思い出していた。瀕死の状態にあるエレンのこうした記憶の想起は、初期統合失調症で体験される自生記憶想起に相当する。こうした自生記憶想起を先行体験として巨人になった。巨人になった時にはエレンの意識はなく、エレンが巨人になる前に一匹残らず巨人を駆逐してやる、という攻撃的欲動のみが生きている。その欲動は無意識のものであり自動的に他の巨人を殺し続ける。つまりエレンが巨人になる時には、自生記憶想起が起こり、臨死体験が生じてもおかしくないような臨死状態に入る必要があつた。巨人になるということは、普通の状態では、決して起こらないのである。そ

こにはひとつの乗り越えたい障壁があるとみることができる。臨死状態のような状態にならないと、その壁を乗り越えることができない。こうした壁の存在は、統合失調症の発病過程にも想定されている。中井(2015)はそれをポテンシャルの壁と命名している。発病時臨界期にポテンシャルの壁が想定され、容易く統合失調症が発病しないようなメカニズムが働く。統合失調症の発病前に感情が高まる時があり、何かが起こる、世界が減じるといったような差し迫った感情に陥る。その感情の高まりによってポテンシャルの壁を越え、発病に至る。こうしたポテンシャルの壁に相当するものが、エレンが、巨人になるときに働いているらしい。エレンは巨人になる前に、非常に激しい感情の嵐の中にある。それを抑制するような、自生記憶想起を体験する。自生記憶想起は、エレンの過去における、安心できる時間の記憶である。その自生記憶想起にもかかわらず、エレンの激情は高まって行く。そしてポテンシャルの壁を越え、そして巨人になった。

巨人になったエレンは、自らの力で、自身の姿に戻ることができない。最初の時は、巨人のエレンが力を使い果たした時に、巨人の首のところからエレンの自らの姿を現した。2回目の時は、瞬間的に、アルミンとミカサを救おうと強く念じたために無意識的に不完全な巨人となり、その状態で意識を取り戻した。3度目に巨人になった時には、巨人の中のエレンの記憶が部分的に蘇り、一度はそのまま眠りに入ってしまうが、アルミンの呼びかけに答えて、無意識の世界の家族イメージを喚起させた。それは「幻魔大戦」の東丈とプリンセス・ルーナとの関係と同様である。上記のように東丈は姉の膝の上にいることをイメージし、そこへ外部からプリンセス・ルーナがやって来る。そして東丈を現実世界に引き戻した。ここではアルミンがプリンセス・ルーナの役割を演じ、東丈に対する姉は、エレンに対する家族である。ここでの状況は、外部から来たアルミンのイメージがエレンに呼びかけなければ、エレンはそのまま巨人の中で眠り続けたであろうことを思わせる。このことを先の統合失調症をモデルにして考えてみると、回復時臨界期のポテンシャルの壁を想定することが出来る。この時のポテンシャルの壁は、回復を妨げる壁として働く。この壁を越えられなければ、統合失調症の状態が続くが、その壁を越えられれば回復

へ向かう。エレンも、アルミンの働き掛けがなければ巨人の中で無意識のままであったろうが、その状態から脱して、エレンの自我が目覚めた。つまりエレンが巨人になるプロセスには、統合失調症の発病と回復のモデルが当てはまるような表現になっていた。

エレンが回復時に悟ったのは、巨人が母親を食べたことから引き起こされた一人残らず巨人を駆逐してやるといった攻撃的欲動ではなく、壁外に自由に出かけて行きたいといった願望を持った人間に生まれついたということであった。こうした自覚はアイデンティティの確立と言い換えることもでき、青年期から成人期への移行期に生じる、社会へ出て行くことの決意の表れでもある。エレンは15歳という年齢にもかかわらず、彼の表明したのは、成人として自立するとの表明であった。自己の責任を引き受け壁の穴を塞ぐために巨岩を運ぶという実際の行動がこれによって起こった。エレンが英雄として、自我を目覚めさせたといえる。このような物語は、感情の谷に陥ったエレンが、感情の谷の奥底で、援助者に出会い、そのことで悟りを得て英雄となったことを示唆している。「進撃の巨人」の新しいことは、感情の谷へ入り込むこととそこから出て行くためには、どちらにもポテンシャルの壁に相当するような壁があるということである。アニメの特質は、ポテンシャルの壁を超える場面を、炎で家族のイメージを消し去り、その前でエレンが決意の表情を示すといった劇的な表現によって作り上げていることである。

先に紹介した「太陽の王子 ホルスの大冒険」も「幻魔大戦」のいずれにおいても感情の谷から主人公を脱出させていたのは、ヒルダやプリンセス・ルーナ(マンガ)といった女性であった。そこには母なるものを想定できた。しかしアニメの「幻魔大戦」では東丈が青年期にあり、心の中で、彼は裸でプリンセス・ルーナと対面したことから、裸の関係、つまり性愛が、象徴されていたと思われた。青年期の切実なテーマがここには現れていた。これに対し「進撃の巨人」では、女性が救済者にはならず、むしろ幼馴染が救済者になり、彼が想起させたのは、幼いころにやりたいと思っていた希望であった。そうした希望を実現化するには精神病に陥るほどの危機に陥らないといけないといっているようであり、現代社会の若者の抱える心理的な閉塞感の切実さがここに象徴されているようである。

ただ「進撃の巨人」の物語はこの後も進展しており、そうした展開は感情の谷のみで説明できる範囲を超えており、それについては新たな論述が別に必要となろう。とはいうものの、「進撃の巨人」の物語の始まりで、10歳のエレンが、ミカサと薪にする枝を集めに行き居眠りしてしまう場面が描かれていた。マンガではエレンが見た夢は描かれませんが、アニメではエレンの夢が挿入される。その中では、断片的に、巨人の襲来と、巨人に食べられてしまう母親らしき姿が臙げに描かれる。その後の巨人の襲来の子知夢のようである。しかしその夢は、起きたとたんに忘れ去られ、記憶には残らない。エレンは、ミカサに指摘されて、自分が涙を流しているのを知る。このシーンが暗示していることは、巨大な壁に囲われた世界が、極めて不安定なもののようにエレンには思われ、そのため彼の心が強く動揺しているということである。しかしその彼の抱える不安は、涙が出てきてからそれに気づくほど、彼の身体感覚から遊離している。心身の状態に乖離がある。こうした心身の乖離が、その後の無意識状態で巨人になるといった意識と身体の乖離状態の先駆となっている。意識と身体の乖離、ということは物語の全体を通して、さまざまに変容しながらも一貫して語られていることのように思われる。意識が乖離している身体への信頼の乏しさが、現代のマンガ、アニメの特質なのかもしれない。そして意識と身体が乖離していることを明確に描いて大ヒットしたのが「君の名は。」であった。

## 5. 「君の名は。」(2016)

「君の名は。」は新海誠監督の作品で、大ヒットしたことは記憶に新しい。彼の新作「天気の子」(2019)も大ヒットした。今最も注目されているアニメ監督の一人である。ここでは「天気の子」ではなく前作の「君の名は。」を取り上げたい。上記のように意識と身体が乖離する、ということが、高校生の男女の間で、心が入れ替わることで描かれる作品であり、そうした心の入れ替わりが、異性としての生活を楽しむことにつながり、異性の身体に適應する不具合については殆ど無視されているという描き方に特徴があるからである。意識が身体に馴染む、ということを考えるうえで、例えば新しく購入した靴を履く時にも、その靴に慣れるまでは少し時間がかかり、場合によっては足にマメが出来たり、靴擦れが出来たりすると

ということがあることから想像できるように、それには時間がかかるだろう、と思う。ましてや異性の身体であるから、身体の生理に対する対応も、相当な困惑を感じると思う。しかしそうしたネガティブな反応は一切ない。意識と身体は即座に親和的なものとなる。

主人公は三葉と瀧である。三葉は女子高校生、瀧は男子高校生である。二人はどういう訳だか意識が相手の身体に入り込んでしまう。しかし自分の身体に戻ってきたときには、異性の身体で体験したことは夢の体験のように、目覚めてすぐに忘れてしまう。ただ、異性の身体に入った時には、それまでの振る舞いと違ったものになるので、三葉はより男性的に、瀧はより女性的に振舞う。それが周囲から見ればより魅力的に感じられる。異性の身体に入り込む生活に慣れ、それぞれの相手に愛着を感じ始めたころ、突然身体の入替わりが起こらなくなる。瀧は、三葉の中に入っていたころの記憶を手掛かりに、三葉の生きた世界を絵に描く。その絵を持って、三葉の住んでいた場所を探しにゆく。何とか探し当てた場所は、3年前の彗星の落下で街ごと消滅していた。図書館で死亡者リストを見ると三葉の名前も見つかる。しかし瀧は三葉の記憶が朧げになってしまう。そして三葉の名前も忘れてしまう。

こうした経緯は、他者の身体に入り込む異常体験、そして記憶が失われるという記憶喪失があり、感情の谷に落ち込んでゆくプロセスを描いていると見ることが出来る。感情の谷底で、瀧は、微かに残った記憶の断片を手掛かりに、山頂にあった御神体を探しに行く決意を固め、山に登り始める。山頂で、御神体を発見し、お供えの三葉が口で噛んで作った口噛み酒を飲んで、足を滑らして転倒し、頭を打ち、意識を失う。そして無意識の底に沈みながら、瀧は三葉の生きた生涯の映像を垣間見る。臨死体験の時に体験される生涯を展望するような体験を、第三者の瀧が、三葉の代りに見ている。そして三葉の身体の中で目覚める。彗星が落下する前の三葉の身体の中である。要するに、瀧の意識は、時間を遡り、過去に行き、生前の三葉の身体の中で目覚めた。意識が時空を超えるという異常体験を体験した。こうして瀧は、三葉の身体を使って、三葉を救おうと試みる。感情の谷の谷底で、瀧は意識を失い、身体は山頂の御神体のところに残したまま、意識が三葉の身体の中に入り込むとい

う体験をした。異性と出会うというより、両者が一体化する。こうした異性と心が一体化するという体験が、異性の出会いの理想的なものということなのであろう。アニメの「幻魔大戦」で裸の丈が、プリンセス・ルナと手を触れ合わせ、性愛が象徴的に示されていたのとは対比的に、性愛を越えた、心の合一体験が、出会いの理想的なものとなった。身体的な感覚は、そこには入り込む余地がない。

さて瀧は、三葉を通して町の住民を彗星の落下から救おうと奮闘するが、市長である父親に「お前は誰だ」と誰何され、結局うまくゆかない。一方、三葉は、昏倒した瀧の身体の中で覚醒し、山頂から下界を眺め、下界の様子が今まで目にしてきたものと全く違っているのを目にし、「私死んだの」と眩く。瀧の時代は、彗星が落下し、三葉の生きた街を破壊した後であるから、三葉は未来にある瀧の身体にまで心を飛ばせたことになる。要するに三葉も異常体験のなかにある。こうして三葉と瀧はそれぞれの時代に飛び、同時間に生きていない。しかし両者は心がつながっているの、同時に、お互いの存在を意識する。そのため三葉の身体に入った瀧は、瀧の身体に入った三葉が山頂にいることに気づく。そして駆けつける。山頂に行きついた瀧は、三葉がいることを感ずるが、相手の身体を見ることができない。夕陽が沈む時に、奇跡が起こり、両者の手が重なり合うようにして、時間が重なり合う。お互いがお互いを目にすることが出来た。意識が元の身体に戻る。感情の谷の更に谷底での時空を超える異常体験の果てに、異性同士が出会う奇跡が起こる。自分に戻った三葉は、今度は自らの自身の手で、彗星の落下から街の人たちを救う決意をする。山頂から麓に駆け戻る三葉は、勢い余って、転がる。それまで覚えていた瀧の名前をその時思い出せないことに気づく。大事な人の名前を忘れてしまっていた。記憶喪失が起こったのである。

一方山頂の瀧は、一夜明けて、目を覚まし、なぜ山頂にいたのかの記憶がない。彼にもまた記憶喪失が起こった。三葉の名前を忘れてしまっている。そればかりでなく、その後成長した瀧は、生きることへの意欲まで失ってしまったかのように就職活動に乗り気になれない。そんな時すれ違った電車の中にある成熟した女性と目が合い、衝撃を受ける。次の駅で下車し、彼女を探す。彼女の方も電車を下車し、彼を探していた。階段で、二人は出会い、すれ違って、

振り返り、感極まって名前を尋ねる。「君の名は」と。二人はお互いの名前を忘れてしまっているが、お互いの身体に入り込んだ一体感は、無意識的なものとして残り、その一体感が、二人の出会いによって身体的に蘇り、なぜとも知れず涙を流している。ここにも心身の乖離があると見る事が出来る。「進撃の巨人」のエレンが、なぜとも知れず涙していてそのことをミカサに言われるまで気づかなかったという状態に類似している。瀧も三葉も、お互いに出会って何が嬉しいのかもわからず、ただ涙している。心と身体が、離れてしまっているというのが現代感覚のようなのである。感情の谷に落ち込んで、異常体験を繰り返し、感情の谷底で異性との出会いと合一を体験するが、現実社会に戻って社会に馴染めない感覚が残り、そうした馴染めない感覚から一転して異性との出会いが歓喜の頂点のように感じられる。出会いは精神の絶頂体験であるといいたいらしい。「君の名は。」は、男女の合一体験という極めて私的なものを最優位なものとして描き、それさえ達成できれば、結果的に社会的には不適格であってもかまわないといっているかのような作品に感じられる。「進撃の巨人」のエレンは15歳ではあったが、人間は自由であるべきだという意識が目覚め、自身の役割を自ら引き受けるということでアイデンティティの確立を見たが、「君の名は。」の二人は社会生活への不適応感を残したまま生きているようなのであり、社会的な意味でのアイデンティティの確立は出来ていないかのようである。感情の谷に落ち込んで英雄として現実に戻るといったパターンから、感情の谷に落ち込んで異性との合一体験を経て、社会での不適応感はあっても、異性との最高の出会い体験をするというように時代の流れが変化してきているように思える。体験が私的なものになり、公共性を求めなくなっている。その証拠に三葉が街を救ったという英雄行為には、アニメはほとんど関心を示さない。

## 6. 終わりに

アニメに見る感情の谷を4つの作品を通して眺めてみた。「太陽の王子 ホルスの大冒険」ではホルスが感情の谷に落ち込み、ヒルダのイメージを浮かべることでそこから脱出できた。ヒルダには母なるものが破壊する力と保護する力が象徴され、感情の谷では両者が出現するが、結局保護する力がホルスを

助けた。「幻魔大戦」はマンガとアニメと二つの作品を取り上げた。マンガの「幻魔大戦」は「太陽の王子ホルスの大冒険」とほぼ同じ時期の作品であり、東丈が感情の谷に落ち込み、姉の膝の上に抱かれているのを、外から丈の心の中に入り込んだプリンセス・ルーナが、姉と引っ張り合って、丈を現実に戻した。ここにも母なるものの破壊する力と保護する力の相克があり、後者の力が優位となった。アニメの「幻魔大戦」では感情の谷に落ち込んだ丈は、姉の膝の上で幼児の姿に退行していた。閉じこもりである。プリンセス・ルーナはただ丈に語り掛け、丈は元の姿に戻ることで意識が目覚める。この時丈の姿は裸であることで、性愛が象徴されていると思われた。1960年代の作品から1980年代の作品への変化を見ると、母なるものへの依存から、同じ世代の性愛による感情の谷の脱出へと大きく変化しているのが分かる。

2009年から始まった「進撃の巨人」のマンガおよびアニメでは、エレンの体験する感情の谷は、巨人に変身するというものであり、その心の奥底では家族との安全な住まいのイメージが生きていた。そこから出ることの必要性を感じないエレンはまた眠り込んでしまう。このままではまさに閉じこもりである。その眠りを覚ましたのが、幼馴染のアルミンであった。アルミンの語り掛けは、エレンの、壁の外へ出かけてゆく動機を思い出させるものであった。エレンの感情の谷脱出は、自身の真の動機を再発見することであり、それは心理学的に言えばアイデンティティの確立であり、青年期から成人期への移行に相当する出来事と思われた。感情の谷を出ることは社会に出て、社会の要請を意識的に引き受けることにつながった。しかし2016年の「君の名は。」では、三葉と瀧は、共に感情の谷に落ち込み、時代を超え、空間を越えてお互いの体の中に入り込み、それにもかかわらず山頂で出会うという体験をした。時空を超える異常体験をしたのであり、その際に、単に出会うということが絶頂体験であるかのように描かれた。現実社会に適応することが必要ではなく、困難な状況で、お互いを見つけ合い、出会うことがすなわち喜びなのだと言ひ、それ以外のことは何も描かない。

以上のようにみえてくると1960年代から2009年のここで紹介した作品は、感情の谷を越え、英雄として社会に出て行き、社会の要請を引き受けて、社会をよくするために頑張るということを描いていた。それ

が2016年の作品になると感情の谷に落ち込み、そこから抜け出ても、社会のために何かをしようとは全く考えず、ただ単に再会するという私的な試みのみに終始する作品となった。その間にアニメで描く世界の大きな変容があり、それと同時に、身体的な生なかかわりではなく、心の触れ合いといった精神的なかわりの重視への転向が生じて来たといえよう。新海誠監督はこの点に関しインタビュー（新海, 2016）の中で「日常がいつなくなってしまうかもしれない感覚って、みんな日に日に強く抱えるようになっていくと思うんですよ。でも、あと少しだけでいいからこの状態を続けていたい。好きな人と一緒にいたい。幸せって、そういう切実な思いの中で初めて見いだせるものだと思うんです」(p.61)と述べている。このように新海作品の前提は「日常がいつなくなってしまうかもしれない感覚」があるとすれば三葉と瀧の出会いに絶頂体験を持ってくるのも理解できる。もう少し幸せが続いてほしいという切なる願いである。これに対しそれまでの作品はその前提ではなく「日常は日常としていつまでも続いていく」という信頼があったのであり、そのために日常に

戻ることが大切だった。しかし現代ではその日常が続くことへの信頼が失われてしまっているということなのであろう。

#### 引用文献

- 平井和正・石森章太郎・桂 千穂・内藤 誠・真崎 守  
1983 シナリオ幻魔大戦 角川書店.
- Jung, C.G.・Jaffé, A.(編) 河合隼雄・藤縄 昭・出井淑子(訳) 1973 ユング自伝2—思い出・夢・思想—みすず書房.
- Jung, C.G. 野村美紀子(訳) 1992 変容の象徴(下) 筑摩書房.
- 中井久夫 2015 中井久夫と考える患者シリーズ1 統合失調症をたどる ラグーナ出版.
- 中安信夫・関由賀子・針間博彦 2017 初期統合失調症新版 星和書店.
- 新海 誠 2016 新海誠インタビュー 新海誠監督作品君の名は。公式ビジュアルガイド 角川書店 pp.58-61.
- 高畑 勲 1983 「ホルス」の映像表現 徳間書店.
- 横田正夫 2006 アニメーションの臨床心理学 誠信書房.
- 横田正夫 2017 大ヒットアニメで語る心理学—「感情の谷」から解き明かす日本アニメの特質 新曜社.